



TITLE:

京大広報 No. 597

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 597. 京大広報 2005, 597: 1819-1836

ISSUE DATE:

2005-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196501>

RIGHT:



# 京大広報

No. 597

2005. 1

## 目次

新しい年を迎えて	総長 尾池和夫……1820	〈寸言〉	
〈大学の動き〉		異分野人脈の力	桜井博之……1831
新年名刺交換会……1822		〈随想〉	
名誉教授称号授与式……1822		本学における医工連携のルーツ	
総長主催「外国人研究者との交歓会」		名誉教授 筏 義人……1832	
の開催……1822		〈洛書〉	
自衛消防団員に対して感謝状を贈呈……1823		マンガ考	高月 紘……1833
事務本部消防訓練・年末特別		〈話題〉	
消防演習行われる……1823		吉田南構内にコンビニエンスストアが	
平成16年度定年退職教員……1824		オープン……1834	
〈部局の動き〉		京都大学未来フォーラム（第7回）を開催……1834	
人文科学研究所「創立75周年記念中国宗教		能楽鑑賞会を開催……1835	
文献研究国際シンポジウム」を開催……1828		〈お知らせ〉	
地球環境学堂が「はんなり京都		京都大学21世紀C O E「物理学の多様性と	
嶋臺(しまだい)塾」を伝統の町家で開催……1829		普遍性の探求拠点」公開講演会……1836	
第104回化学研究所研究発表会を開催……1830		〈日誌〉……1836	
		〈編集後記〉……1836	



吉田南構内に  
コンビニエンスストアがオープン  
—関連記事 本文1834 ページ—

京都大学広報委員会  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 新しい年を迎えて

総長 尾池 和夫

みなさん、明けましておめでとうございます。

今年の初詣は、私は茨城県鹿島の鹿島神宮へ行ってきました。境内の要石が、しっかりと鯰の頭を押さえているかを確認するのが目的でありました。



京都大学の基本理念には、地球社会の調和ある共存に貢献するということがありますが。私にとって自然と人のことを考える年末年始でした。地球科学の研究者にとっては、地球に大きな現象が起こるたびに「なるほど」と教えられることばかりです。思いもよらないというような現象はあまり起こることはありません。しかし、世界の多くの市民にとっては、思いもよらない現象が起こり災害が起こるのです。そこには科学者と市民の知識の大きな差があります。

地球のことを知るのには大学での研究であり、市民に知識を伝えるのは教育です。研究は進んでいても、その成果が市民に伝わらなければなりません。学生の教育がもっとも大きな知の伝達ですが、大学で仕事する研究者自身の著作活動、講演会やテレビ番組企画への協力なども重要なことであると思います。ただ、市民にわかりやすく話をするということは、かなり訓練をしないとたやすくできることではありません。

大学が行う組織的なものとしては、広報活動への定常的な財政的、人的投資が必要であります。ホームページや広報誌などでの情報の発信もあり、講演会や展示会、博物館など、市民に開放された場を通じて行う活動もあります。

京都大学ではシニアキャンパスという名で、社会

人をキャンパスの中に受け入れてみたり、高校生のためのオープンキャンパスや体験授業、出前講義などを試みてきました。また本年は、オープンコースウェアと呼んで、京都大学の講義を世界の人びとに公開することを考えています。また、ジュニアキャンパスと呼んで、中学生に学問をきちんと講義するという計画も持っています。

今年、一番の大きな難問が、平成17年度の予算編成の結果であります。この中で、政府は、授業料の標準額を改訂するとしました。改訂とはすなわち値上げであります。私はかねてより、授業料を下げるよう改訂する提案をするのが文部科学省の役目であると述べてきました。今回の改訂は決して容認できることではないと、国立大学協会も意思表示しました。世界的に見ても飛び抜けて高い授業料で、家庭の教育費の負担が大きく、少子化を招いています。学生が安心して学習に励むことのできる環境を守るために、みなさんのご協力をお願いしたいと思います。

1897年に設置された京都大学の歴史は、2005年の今年、108年目に入ることになります。このような歴史を考えながら、昨年、ようやく京都大学同窓会準備室を設置しました。今まで、学部ごとに、あるいは教室ごとに、またゼミごとに、多くの同窓会が置かれているのですが、それらのゆるやかな連携組織を作って行きたいと考えています。みなさんのご協力をお願いしたいと思います。今年も、課外活動の部などで100周年を祝うところがあるでしょう。例えば、硬式庭球部が100周年のお祝いをすると思っています。これらの同窓会も、また元教職員の同窓会もできるように連携していきたいと思っています。

次に、今年は男女共同参画社会をテーマにして私自身が学習したいと思っています。京都大学では、このような取り組みがまだ遅れているように思います。例えば、京都大学の教職員や学生のために、保育所を増やす必要はないだろうかと考えてみます。学生や院生以外も利用できる「地域開放型」で、社

会人学生のための福利厚生の実質が必要ではないでしょうか。生涯学習を課題とする以上、この問題を並行して考えることが必要だと思います。

社会人が大学院に入る傾向が強くなると、働いている夫婦の一方が大学院に行く事になるでしょう。そのとき保育所が必要になります。もちろん零歳児も受け入れ、保育時間を長くし、預ける側が保育時間の長さを決めることができるというような工夫も必要になるでしょう。このようなテーマで学習するための情報を、あるいは考え方をぜひ私に提供していただきたいとお願いします。

昨年7月20日に定めた京都大学の教職員像の最後は、「教育・研究を支援し、大学・部局を運営していく業務は、その持続的発展のために極めて重要である。教職員は、大学が社会的存在であることを認識し、高次の専門的能力と総合的視野をもってその職責を全うできるよう常に自己研鑽に努め、教育・研究基盤の充実、大学・部局の円滑な運営と発展に寄与する」とされています。みなさん一人ひとりがその仕事を完璧にこなしていくためには、その仕事に必要な能力を身につけていなければなりません。そのための自己研鑽であります。

高次の専門的能力を持つということは、みなさんの一人ひとりが私よりもよくできるということの意味します。仕事のことで、私に教え、私になるほどと思わせることが必要であります。みなさんの仕事からの提案を私は勉強し、みなさんの出す情報から私は正しく京都大学や社会の将来を読みとります。

昨年は途中で非公務員となって、いささか戸惑った方もいたようです。その戸惑いが実はたいへん重要なことであります。京都大学の自治はますます強化され、国からの交付金をもとにしながら、大学の意志によってさまざまなことができる制度になりました。戸惑いながら今までのしがらみに捕らわれずに仕事をしてほしいと思います。

学生のみなさんをお願いしたいのは、日本の大学の制度をよく知って、諸外国の制度と比べながら、学習の方向を考えてほしいということです。例えば日本の大学の博士の数は、欧米の大学に比べて理学より工学が多く、人文・社会系が少ないという特性

があります。このような特性が将来国際的に仕事をしていく上でどのような影響を持つかというようなことも分析しながら進路を選ぶという考えも必要だと思います。また一方では、国立大学の法人化に際してのさまざまな議論に影響されることなく、世界的に優れた研究者に出会うことを第一として、どんどん出かけて行って異なる研究環境に触れながら、選んだ学問分野をまっしぐらに進んでほしいと思います。そして今京都大学で学習している知識と研究の能力を生かして、世界の舞台で世界の人々のために貢献してほしいと思います。

今年も、みなさんがご自分の体をいたわって、健康な一年を過ごすことに心がけていただきたいと思います。その上で力一杯、研究と教育と、それらを支援する仕事をする、そういう一年であってほしいと願いつつ、私の新年の挨拶といたします。





## 大学の動き

### 新年名刺交換会

1月4日（火）の午前10時から時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長をはじめ沢田敏男元総長、西島安則元総長、各名誉教授、金田章裕、東山紘久、入倉孝次郎、本間政雄、田中成明、辻文三の各副学長、各部局長及び教職員約250名の出席のもとに本学恒例の新年名刺交換会が盛大に行われた。

はじめに尾池総長から新年の挨拶があり、この中で、尾池総長は、京都大学の講義を世界に向けて発信するオープンコースウェア、ジュニアキャンパスと呼ぶ中学生を対象とした講座など今年からの新し

い取り組みについての抱負を語るとともに、これからも学生が学習に専念できる環境を守りたいとの決意を述べた。続いて沢田元総長の発声による乾杯で新年を祝った。盛会のうちに午前11時に終了した。



### 名誉教授称号授与式

平成16年12月15日（水）の午前10時から総長応接室において本間政雄副学長、成宮 周医学研究科長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、尾池和夫総長から福井次矢元教授（大学院医学研究科）に称号が授与された。



### 総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催

総長主催の「外国人研究者との交歓会」が平成16年12月21日（火）に開催された。この交歓会は、本



学において教育、研究に従事している外国人研究者と総長をはじめとした本学関係教員とが交流を深めることを目的に毎年開催されているもので、今年度も時計台記念館国際交流ホールを会場に約300人の出席者を得て開催された。当日は、尾池和夫総長の挨拶の後、外国人研究者を代表して人文科学研究所の Susan HANLEY 客員教授から挨拶があり、引き続き入倉孝次郎理事・副学長の乾杯の発声の後、会場のそこかしこで談笑の輪が広がり、盛会のうちに閉会した。

## 自衛消防団員に対して感謝状を贈呈

平成16年12月22日（水）午前10時30分から事務本部5階大会議室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状及び記念品が澤田人事部長より贈呈された。

感謝状を受けた団員は、井山有三（施設・環境部）、玉井裕之（三研究科共通事務部）の両氏である。



感謝状を受ける団員

## 事務本部消防訓練・年末特別消防演習行われる

平成16年12月22日（水）に事務本部消防計画に基づく事務本部職員の消防訓練が午後2時から約1時間にわたり左京消防署の指導のもとに行われた。

参加者は、3グループに分かれ、屋内消火栓訓練、消火器訓練、119番通報訓練を実際に体験し、万一の場合に役立つような基本訓練を行った。

また、同日午後3時から本部地区自衛消防団による恒例の年末特別消防演習が実施され、消防車及び屋外消火栓による放水訓練が行われた。

なお、各部局等においても、次のとおり実施された。

実施年月	実施部局名等
6月7日	原子炉実験所
8月3日	附属図書館
10月12日	原子炉実験所
12月3日	医療技術短期大学部
12月6日	北部構内
12月9日	宇治地区



職員が屋内消火栓を体験



自衛消防団による消防演習風景

## 平成16年度定年退職教員

京都大学教員定年規程により、次の教員（教授60名、助教授8名、講師2名、助手13名）が、本年3月31日付けで退職の予定である。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	内 山 勝 利	思想文化学専攻 哲学・宗教学講座	プラトン、アリストテレスを中心とする古代ギリシア 哲学思想に関する研究
〃	佐々木 丞 平	思想文化学専攻 美学・美術史学講座	日本近世絵画史研究
〃	寶 月 誠	行動文化学専攻 社会学講座	逸脱とコントロールの社会学的研究
教育学研究科	江 原 武 一	教育科学専攻 比較教育政策学講座	高等教育の社会学的比較研究 多文化教育・価値教育の比較研究
〃	竹 内 洋	教育科学専攻 教育社会学講座	教育社会学・歴史社会学：教育をフィールドにした知 識人や学生などの近・現代社会研究
〃	山 中 康 裕	臨床教育学専攻 心理臨床学講座	心理臨床学領域における表現療法の研究及び精神医学 領域との境界領域における心理療法の研究
法学研究科	杉 原 高 嶺	公法専攻 国際法講座	国際裁判の制度と機能の研究、海洋法制度の研究、及 び国際法の体系化の研究
〃	山 崎 一 男	総合法政分析講座	企業内における労働組合の影響力に関する英独仏日の 比較研究
理学研究科	大 見 哲 巨	物理学・宇宙物理学専攻 物性基礎論講座	液体および固体ヘリウム、アルカリ原子気体等の量子 凝縮体についての理論的研究
〃	寺 尾 武 彦	化学専攻 物性化学講座	固体NMR分光学における方法論の開発研究と化学の 諸問題への応用研究
〃	西 田 孝 明	数学・数理解析専攻 相関数理講座	非線形偏微分方程式の研究
〃	松 田 哲	物理学・宇宙物理学専攻 相関重力基礎論講座	素粒子論の研究、特に超弦理論とその超共形代数構造 に関する研究
〃	平 田 龍 幸	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	高温星の質量放出現象に関する研究
医学研究科	井 出 千 束	生理系専攻 生体構造医学講座	知覚終末の微細形態、末梢神経および脊髄の再生、脈 絡叢上皮細胞の中樞神経保護機能に関する研究
〃	田 中 絃 一	外科系専攻 外科学講座	臓器移植（肝臓・小腸・膵臓）の研究、移植免疫および 周術期管理の研究、小児胆道閉鎖症の病態と治療の研究
〃	本 庶 佑	分子医学系専攻 分子生体統御学講座	免疫系における抗体の多様性獲得のメカニズムおよび 免疫細胞の分化・増殖のメカニズムに関する研究
医 学 部	中 井 義 勝	保健学科看護学専攻 臨床看護学講座	代謝内分泌疾患および摂食障害・ストレス関連疾患の 疫学・成因に関する研究と治療法の開発
薬学研究科	川 寄 敏 祐	生命薬科学専攻 生体分子薬学講座	生体防御因子としての動物レクチン及び神経系特異的 等糖鎖の構造と機能に関する研究
工学研究科	飯 田 恭 敬	都市社会工学専攻 交通マネジメント工学講座	都市活動と交通システムの相互作用、交通ネットワーク の信頼性、交通運用システムの高度化等に関する研究



部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	小 野 紘 一	都市環境工学専攻 複合構造デザイン工学講座	コンクリート複合構造, 建設新素材, 永久凍土地盤とパイプライン, トンネルと火災対策, 構造物延命等の研究
〃	小 林 四 郎	材料化学専攻 高分子材料化学講座	酵素を触媒とする新規高分子合成法の開拓と生体高分子を含む新しい高分子材料の創製・応用に関する研究
〃	橋 本 竹 治	高分子化学専攻 高分子物性講座	高分子物性, 高分子系の相転移と分子集合体形成・分子集合体力学に関する研究, ソフトマター物理学
〃	藤 本 孝	機械物理工学専攻 物性工学講座	プラズマ分光, レーザー原子過程研究の理論的ならびに実験的研究
〃	吉 川 恒 夫	機械工学専攻 機械設計制御工学講座	ロボット工学および制御工学における理論的ならびに実験的研究
〃	渡 邊 英 一	社会基盤工学専攻 構造工学講座	鋼構造物の力学的特性(座屈, 劣化, 信頼性), 浮体構造物, 構造物のサイバーネット試験法, 耐震構造設計法
〃	宮 田 昇	材料化学専攻 機能材料設計学講座	セラミックスおよび有機-無機ハイブリッドの構造と物性に関する研究
〃	山 本 悟	材料工学専攻 材料機能学講座	金属・合金の結合・構造・物性・反応の研究, 分子軌道法による材料物性の理論的評価
〃	梅 田 吉 邦	航空宇宙工学専攻 航空宇宙解析工学講座	超音速ジェットの自励振動とスクリーチ・トーンの音源の振舞いに関する実験的研究
〃	金 丸 一 宏	機械工学専攻 熱流体工学講座	燃焼および動力システムに関する研究
〃	佐 藤 弘 子	高分子化学専攻 高分子物性講座	血液関連タンパク質および細胞と医用高分子表面に関する研究
〃	正 脇 謙 次	機械工学専攻 機械設計制御工学講座	転位論を基本とする固体のひずみ硬化挙動に関する理論的解析
〃	高 橋 修	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	荷電粒子を用いた非破壊検査法の開発に関する研究
農 学 研 究 科	池 田 篤 治	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	生体分子機能の基礎解析と有効利用に関する生物電気化学の研究
〃	池 田 善 郎	地域環境科学専攻 生物生産工学講座	精米工程の音響モニタリングの研究, 家畜の音声及び画像(顔, 斑紋等)解析による個体識別に関する研究
〃	伊 藤 操 子	農学専攻 耕地生態科学講座	雑草学分野に関する研究
〃	加 藤 暢 夫	応用生命科学専攻 応用微生物学講座	微生物の代謝とその応用に関する研究
〃	菊 澤 喜八郎	森林科学専攻 森林生産学講座	森林生物の生長・繁殖様式および森林の生産構造に関する生態学的研究
〃	高 橋 強	地域環境科学専攻 地域環境管理工学講座	農村環境の整備と保全に関する研究
〃	辻 井 博	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	途上諸国の農業・農村・農業政策問題の経済学的研究
〃	林 勇 夫	応用生物科学専攻 海洋生物生産学講座	多毛類を主とする海洋無脊椎動物の形態および生態に関する研究
〃	廣 瀬 正 明	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	卵白タンパク質の応用構造生物学的研究



部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農 学 研 究 科	吉 田 鐵 也	森林科学専攻 緑地環境保全学講座	都市域オープンスペース計画論における住民参加型デザインの有効性についての研究
〃	中 谷 博	食品生物科学専攻 食品生命科学講座	酵素反応速度論に関する理論的、実験的研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	石 川 光 庸	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	ドイツを中心とする古ゲルマンの言語と文学に関する文献学的研究
〃	片 桐 晃	相関環境学専攻 物質相関論講座	エネルギー変換および環境汚染物質の防除に関する電気化学的研究
〃	田 口 貞 善	共生人間学専攻 認知・行動科学講座	種々の環境に対する生体の生理学的適応を心筋および骨格筋の組織化学的・酵素化学的解析から探求
〃	安 井 邦 夫	共生人間学専攻 思想文化論講座	ドイツ観念論の哲学，現代ドイツ哲学，「自己関係性」の問題に関する研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	石 井 隆 次	エネルギー応用科学専攻 資源エネルギー学講座	宇宙資源エネルギー学，超音速空気力学に関する研究
〃	笠 原 三紀夫	エネルギー社会・環境科学専攻 エネルギー社会環境学講座	エネルギー環境に関する研究，エアロゾルに関する研究，大気環境科学に関する研究
情 報 学 研 究 科	英 保 茂	システム科学専攻 システム情報論講座	画像情報処理・医用工学に関する研究
〃	片 山 徹	数理工学専攻 システム数理講座	確率システムの推定，同定，制御に関する理論的研究
〃	野 木 達 夫	複雑系科学専攻 複雑系構成論講座	計算数学と並列計算機の研究
生 命 科 学 研 究 科	泉 井 桂	統合生命科学専攻 環境応答制御学講座	C 4 光合成の炭酸固定酵素の構造と機能の分子的解析およびC 4 光合成の調節と成立の分子植物生理学的研究
〃	中 西 重 忠	高次生命科学専攻 認知情報学講座	高次脳機能発現と脳神経系の情報伝達の分子メカニズムの研究
〃	柳 田 充 弘	統合生命科学専攻 遺伝機構学講座	染色体の分配と安定性に関する分子細胞生物学的研究
化 学 研 究 所	梅 村 純 三	環境物質化学研究系	振動スペクトルによる両親媒性物質－水系・超薄膜系の構造研究
〃	杉 浦 幸 雄	生体機能化学研究系	生物活性分子によるDNA認識と機能発現に関する研究
人 文 科 学 研 究 所	小 南 一 郎	文化表象研究部門	中国古代の伝承文化，特に神話，語り物文芸，儀礼，文字の起源などについての研究
〃	前 川 和 也	文化連関研究部門	アッシリア学，とりわけ前3千年紀シュメール行政・経済文書の研究
エ ネ ル ギ ー 工 学 研 究 所	足 立 基 齊	エネルギー利用過程 研究部門	自己組織化による形状制御したナノサイズ材料の創製と高効率エネルギー変換システムの構築の研究
〃	大久保 捷 敏	エネルギー利用過程 研究部門	持続的再生型社会形成のためのエネルギーおよび環境技術基盤となる機能性先進材料開発に関する研究
〃	大 槻 徹	附属エネルギー複合機構 研究センター	エネルギー材料に関する研究
生 存 圏 研 究 所	島 田 幹 夫	生存圏診断統御研究系	樹木主要成分であるリグニンの生合成と生分解および菌類（きのこ）の代謝生理機能に関する研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
防 災 研 究 所	井 上 和 也	水災害研究部門	水理解析法およびその都市水害の防止・軽減策への応用に関する研究
〃	植 田 洋 匡	大気災害研究部門	環境流体力学に基づく、集中豪雨、台風等の異常気象、酸性雨等大気環境変動のメカニズムに関する研究
〃	佐 藤 忠 信	地震災害研究部門	非定常時系列解析、地盤・基礎系の非線形振動特性、ライフラインの信頼性、構造物の耐震安全性に関する研究
〃	重 富 國 宏	附属地震予知研究センター	地殻歪および地下水位の連続観測により、その時空間変化を検出し、地震発生との関係を研究する
基 礎 物 理 学 研 究 所	阿 部 恭 久	物質構造研究部門	原子核の分子的構造及び重イオン核反応機構の研究
〃	寺 崎 邦 彦	極限構造研究部門	ハドロンの物理、ハドロンの生成・崩壊・分光学、多クォークハドロンの物理の研究
ウ イ ル ス 研 究 所	重 定 勝 哉	細胞生物学研究部門	遺伝子発現制御因子RUNXの同定とその発生分化及び発がんにおける役割に関する研究
〃	長谷川 捷 一	生体応答学研究部門	腫瘍細胞特異的表面抗原の表面免疫複合体分析法および尺骨神経縫合後遺症に対する円筒弾性帯療法の開発
原 子 炉 実 験 所	川 瀬 洋 一	粒子線基礎物性研究部門	オンライン同位体分離装置の開発研究とそれを用いた原子核構造研究及び核的手法の物質科学研究への応用研究
〃	岡 田 守 民	原子力基礎工学研究部門	各種材料の中性子照射効果に関する研究
〃	川 野 眞 治	粒子線基礎物性研究部門	中性子散乱による希土類金属、合金、化合物の極端条件下における磁性の研究と関連する装置の開発
〃	小 野 光 一	原子力基礎工学研究部門	原子炉等放射線の吸収線量測定法の研究
〃	川 本 圭 造	粒子線基礎物性研究部門	生体試料中の希土類元素分布パターンの比較研究 酸化的仮想原始大気からの化学進化の研究
〃	田 中 愛 子	原子力基礎工学研究部門	生物と微量元素及びその化合物との相互作用に関する実験的研究－培養細胞への希土類元素の取り込み－
霊 長 類 研 究 所	庄 武 孝 義	進化系統研究部門	霊長類の集団遺伝学的研究
〃	竹 中 修	分子生理研究部門	霊長類遺伝子DNAの解析による、父子等血縁、地域集団間差異、系統関係進化に関する研究
環 境 保 全 セ ン タ ー	高 月 紘		廃棄物処理、有害廃棄物管理、リサイクルシステム、環境安全化学、エコロジカルライフスタイル等の研究
高 等 教 育 研 究 開 発 推 進 セ ン タ ー	中 村 榮 太 郎	全学共通教育カリキュラム企画開発部門	老化の指標としての生物学的年齢の推定に関する研究
〃	松 島 征	全学共通教育カリキュラム企画開発部門	フランス語教育法、フランス文学・文芸理論、文化記号論、比較文化論、メディア・スタディーズなどの研究
フ ィ ー ル ド 科 学 教 育 研 究 セ ン タ ー	田名瀬 英 朋	基礎海洋生物学部門	和歌山県南部水域の水生動物相（淡水海綿類、ミドリイガイ、シオマネキ類など）の研究

## 部局の動き

## 人文科学研究所「創立75周年記念中国宗教文献研究国際シンポジウム」を開催



マニ教と景教文献について語る  
林悟殊氏

人文科学研究所は創立75周年を記念し、イタリア国立東方学研究所、フランス国立極東学院との共催により「中国宗教文献研究国際シンポジウム」を平成16年11月18日（木）～21日（日）の間、時計台記念館において開催した。

このシンポジウムは21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」事業の一環でもあり、国外から16名（中国6名、台湾2名、フランス2名、イタリア2名、アメリカ2名、ドイツ1名、オランダ1名）、国内から5名の研究者を招待し、人文科学研究所のスタッフ5名を加えた計26名の発表者によって最新の研究成果が報告された。

初日は、入倉孝次郎副学長による開会の挨拶、森時彦人文科学研究所長による開会の辞の後、中国仏教文献に関する七つの報告が行われた。2日目は午前中が仏教文献、午後がマニ教、景教、イスラム教文献に関するセッション、3日目は午前午後とも道教文献セッション、最終4日目には仏教、道教文献の電子化とそれに基づく新たな研究に関するセッ

ションがそれぞれ開催され、最後に21世紀COEプログラム拠点リーダー高田時雄人文科学研究所教授による閉会の辞をもってシンポジウムは成功裏に閉幕した。

きわめて専門性が高く、また密度の濃いシンポジウ

ムであり、かつ使用言語も日本語・英語・中国語と多岐にわたったにもかかわらず、初日から最終日まで毎日100人を超す参加者があり、それぞれの報告について活発な討論が行われたことは、人文科学研究所がイタリア国立東方学研究所、フランス国立極東学院の協力を得て構想している「人文学国際研究センター」設立へ向けての貴重なステップともなった。

またシンポジウムの開催期間をはさんで11月13日（土）～21日（日）には時計台記念館1階の歴史展示室内にて「人文科学研究のフロンティア 歴史の語る未来」と題する創立75周年記念特別展示を行なった。研究の概要と最新の成果をパネルで紹介するとともに、人文科学研究所の所蔵する貴重書や発掘品、甲骨、拓本、研究報告書などを展示した。11月祭の開催期間と重なったこともあり、シンポジウムの参加者を始めとして、数多くの一般の参観者も熱心に見学していた。

（人文科学研究所）



道教文献の研究報告をする  
F. Verellen 氏



時計台記念館のシンポジウム会場



## 地球環境学堂が「はんなり京都嶋臺塾」<sup>しまだい</sup>を伝統の町家で開催

地球環境学堂では、さる平成16年11月29日（月）夕に、第1回の「はんなり京都嶋臺塾」を、東洞院御池にある町家で開催した。



当日の講師3名・参加者ら

この催しは、地球環境学堂・学舎の連携を支援する組織である三才学林が企画、先端の地球環境学の成果を＜京ことば＞で練り直すことにより、世界環境都市にふさわしい、あらたな力のある美意識や生活作法をさぐり、地域にひろめることをめざす連続懇話会である。「水」「土」「緑」「景」「空」などのテーマにつき、大学、環境活動グループ、市中町内から講師を出し合っの鼎談方式で、四季折々に開く。

会場の＜嶋臺＞は、近衛家熙、与謝蕪村、頼山陽、富岡鉄斎、内藤湖南といった京都ゆかりの文人が三百年にわたってさまざまな縁を楽しんできた、白壁と糸屋格子が美しい町家で、国の文化財に指定されている。

このたびは事始めとして、「京の水、世界の水」と題して、中原紘之学堂長、嶋臺の山田光子氏の挨拶のあと、大窪健之学堂助教授、松井 恵京都環境アクションネットワーク代表、毛利ゆき子西陣和装学院学長が、近代上下水道設置以前にあった水と暮らしのかかわりを現代の日常に蘇らせることが、防災や環境改善にとって大切であることを語り合った。横山俊夫三

才学林長の司会のもと、奥座敷二間をうめた四十名あまりの方々との意見交換があり、最後に松井三郎学堂教授が、現代世界で水利用に関して求められている倫理や美学について語り、学堂・学舎設置以来の＜知行合一の学術＞へのこころざしを新たにしたい一歩であった。

今回は、「京の土、アフリカの土」と題して、平成17年早春の開催を予定している。

（地球環境学堂）



町家「嶋臺」の建物正面



嶋臺塾の様子



## 第104回化学研究所研究発表会を開催

化学研究所では、平成16年12月3日（金）に宇治キャンパスの化学研究所共同研究棟で、第104回化学研究所研究発表会を開催した。



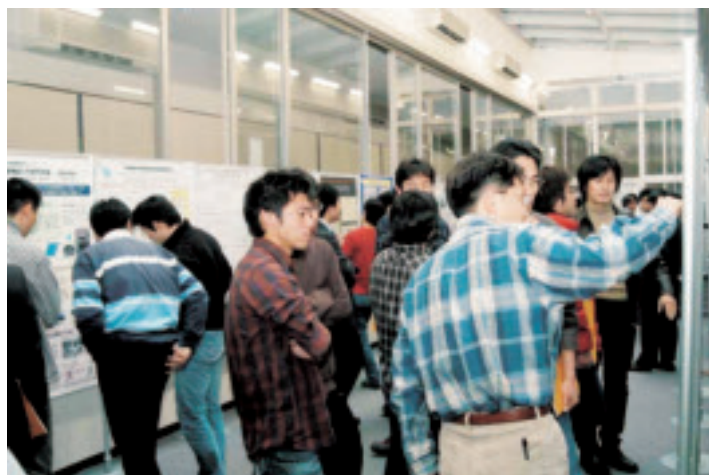
今回は、国立大学法人となって初めての研究発表会であり、開会の挨拶に立った高野幹夫所長は、法人化の真の意義は「個性輝く大学」の構築にあるとし、また、化学研究所は「存在感の強い『個性輝く構成部局』であるべく、研究分野の幅広さを活かした融合的で先鋭的な研究を推進する」姿勢を強める必要があり、伝統的見地を捉えつつ研究所を発展させていきたいと述べた。

研究発表会は、午前3件・午後4件の口頭発表とその間に設けたポスターセッション（発表67件）により構成された。講演会午前の部では、田中静吾助教授（分子臨床化学）「細胞の生死を制御する分子機構」、馬見塚 拓客員助教授（寄附研究部門プロテオームインフォマティクス）「糖鎖データベースから

のデータマイニング」の講演、第9回化学研究所『所長賞』受賞者の辻 勇人助手（典型元素機能化学）

「環構造を用いたオリゴシランの立体配座制御」の受賞講演、また、『奨励賞』受賞者の斎藤茂樹、篠原朗大2名の若手研究者によるポスタープレビューを行った。ポスターセッションでは前後二部に分かれ、最新の研究結果について活発な討議が行われた。

また、午後の部での講演会では平竹 潤助教授（生体触媒化学）「酵素の構造とメカニズムを探る阻害剤設計」、岡崎雅明助教授（遷移金属錯体化学）「四鉄骨格上でのアセチレン2分子の段階的臭素化反応」、吉田弘幸助手（分子集合解析）「アクリロニトリルクラスターイオンの固体基板上への堆積」、根本 隆助手（複合ナノ解析化学）「固液界面における結晶成長と加工」、白井敏之助手（粒子ビーム科学）「電子リングKSRにおけるビーム物理」の講演が行われ、気鋭の教員が化学研究所の特長である“化学を中心とした広い自然科学分野”にわたる最先端の研究成果を生き活きと伝えた。所内を含む約120名の参加者を得て、それぞれに熱心な聴講と活発な討論が行われた。



## 寸言

## 異分野人脈の力

桜井 博之



洛北大原行のバスが八瀬の集落を過ぎると、登山口というバス停に着きます。ここから高野川の右岸の谷を10分余り上った山麓に、「蒼穹会植林地」という小さな石標があります。ここが京都大学陸上競技部のOB会である「蒼穹会」が保有する広さ約9千平方メートルの杉・檜の森です。何故陸上部が植林かについては35年前、1969（昭和44）年大学紛争に荒れていた当時に遡ります。私はその春卒業の陸上部OBの一人ですが、部の育ての親で蒼穹会会長の木村潔さん（故人：大正13年卒、当時和歌山県立医大教授）は、環境問題や学生紛争を深く憂え陸上部と学生の長期的な育成構想の一つとして植林事業を暖められていました。これに共感された2年後輩の益本利民さん（故人：当時修学院で内科医）が八瀬の山林地主の知人を紹介され、長期借用できることになったのです。そして現地に適した植樹品種の選定には林学専門OBの意見を入れ、現役部員の参加で雑木の伐採、植樹地の整備を進め、会員の寄付で運営基金を作り1970年3月に第1回の植樹祭を実施、苗木は芦生演習林の支援を受けるなどして3年では植林を終えました。以来30余年、樹高20m以上のうっそうとした森林の中で、毎年初夏の半日、植林祭と称して現役陸上部の新人歓迎とOB交流のハイキングを行っています。

陸上競技部は北白川農学部グラウンドで練習をしていますが、北西角にオリンピックオークが聳えているのをご存知の方も多と思います。1936年のベルリンオリンピック三段跳で、京大陸上部出身の田島直人さんが世界新記録で優勝、同期の原田正夫さんが2位と揃ってメダルに輝きました。その時優勝者に贈られた記念のドイツ柏の鉢植を田島さんが帰国後京大植物園に寄託され、戦後農学部グラウンドに移されて育った樹です。異なる環境で70年近く成長して来た陰には、理学部植物園、農学部演習林の先輩

方やグラウンドの管理をされる学生部の方々の尽力が有ったことで、蒼穹会としても学生部の協力を得て2001年から造園学の泰斗近藤公夫さん（昭和28年卒）以下土壌学専門家による診断も含め整備に努め、2002年4月に顕彰碑除幕式を行いました。

私事になりますが、私はメーカに就職し主に人事や工場管理を担当していました。10年前、未経験の情報通信関連の市場開発・営業担当に変わりました。不案内な情報通信の業界動向について社外からの公平な情報も必要です。適切なアドバイスをくれたのが陸上部同期や後輩でNTT等にいるこの世界のプロ達でした。時には競合することもある中で、中立的な話が聞けるのは同窓、且つ同じグラウンドで汗を流した仲間ならではの感謝しています。

いずれも、総合大学でさまざまな分野の専門家が育ち、その縦横の繋がりが底にあってのことだと思います。亡くなった田島さんが1980年の会誌に、ベルリン大会に選ばれたとき木村潔会長から、疲労回復や精神安定の処方と指導を得て「これは効いた。・・あるとき私は総合大学のありがたさをしみじみ思った。」と書いています。

私の卒業直前、1969年1月から京大も紛争混乱が続きました。その中で大学とは何かを自分なりに考え、(1) 文部省は大学を高等教育機関というのが大学教員は研究機関と考えるすれ違いがあり、教育の視点回復が必要、(2) 肥大化した京大は文・理2学部とし他の実学系学部は専門大学として独立させる、等の諸点を「京大改革のために」という小文にまとめ、当時の奥田総長他に郵送しました。今から思うと(2)の専門大学分離論は思慮不足だったようです。京大でも異分野・異業種の協働を可能にする総合大学の強みが一層発揮されるよう期待しています。

（さくらい ひろゆき （株）ベイ・コミュニケーションズ 専務取締役 昭和44年法学部卒）



## 随想

## 本学における医工連携のルーツ

名誉教授 筏 義人

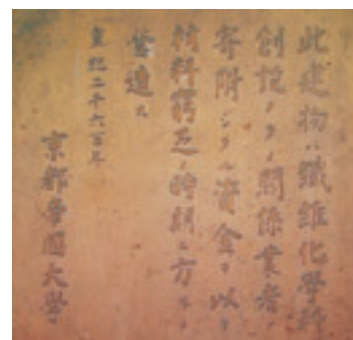
“医工連携”特集が去る11月下旬に三回続けてNHKで報道された。マスメディアに取り上げられるほどであるため、大学においても、今や医工連携は重要なキーワードである。本学では、「京都大学医工連携シンポジウム」が平成15年2月、そして二回目が昨年の7月に開催され、工学系から51件の研究成果がパネル展示された。このような医工連携は本学でいつ頃から始まったのであろうか。実はそれを明らかにするのは容易でなく、まして11月下旬の原稿依頼から締め切りまで3週間の猶予しかなければ、なおさらである。そこで、独断を覚悟で私の信ずるルーツを紹介する。

それは終戦直後に始まった。当時の結核研究所の長石忠三グループと工学部繊維化学科の櫻田一郎グループとの共同研究である。そのテーマは、当時、最大の国民病であった結核の治療であり、開放性肺結核患者のもつ空洞が結核菌の温床となるのを防止するため、そこを材料で充塞するのを目的とした。考え出された方法は、軽い中空体を埋め込むことであつた。用いた材料はメタクリル樹脂であり、その臨床結果は1947年の学術誌に発表された。しかし、中空球内に溜まった水の重量のために球が肺組織内に落下する現象が起こり、体外に摘出する事態が続出した。そこで、次にホルマール化PVA スポンジによる空洞充塞術が試みられた。この材料のほうの結果は良好であつたが、抗生物質の普及により採用されなくなった。埋め込み数十年後に摘出されたPVAを試験する機会があつたが、異常を認めなかった。

このホルマール化PVAは、わが師櫻田先生の発明によるビニロンと同一素材である。国産初の合成繊維であるビニロンは、当初、学生服のような衣料に用いられ、次にロープや帆布などの工業用繊維として重宝され、今日ではアンコール・ワットのような世界遺産の修復材としても威力を発揮している。ビニロンの開発は太平洋戦争勃発の少し前より始



此建物ハ纖維化学科  
創設ノタメ關係業者ノ  
寄附シタル資金ヲ以テ  
材料窮乏ノ時期ニ方リテ  
榮造ス  
皇紀二千六百年  
京都帝國大學



まったが、それを大きく支えたのは産学協同体制であつた。それを裏付けるのが写真に見られる銘板である。それは、吉田キャンパスの4号館と土木総合館の間にある、旧称高分子化学教室別館の入り口に嵌め込まれている。戦時下に建造されて吉田キャンパスに現存する唯一の建物としてのみならず、京大における産学協同の歴史的モニュメントとしても、この建物を保存してほしいものである。西澤潤一東北大元学長は……日本が創造した産業は、相当規模のものとしてはビニール・ビニロン産業只一つといえるかも知れない……と書かれている。

本小文の冒頭でふれたNHK“医工連携”特集では、本学法学部卒の野村正育アナがその研究成果は2年あるいは4年後に実用化されると解説していた。大量生産を伴う工業化を実用化と定義すれば、治験を必要とする医療機器では、学内の研究のみでは数年後の実用化は、到底、おぼつかない。医工連携が学内のみに終始するならば、それは多くの患者に貢献することなく、特許あるいは論文だけに終わりがねない。その大きな理由は、“ものづくり”施設を大学が持たないためである。医工連携には産学連携も不可欠なのである。産業界も、ビジネスに急ぐあまり基礎研究を重視できないのならば、せめて、得意のものづくり力を携えて大学との共同研究に積極的に参加すべきである。

なお、今日の再生医科学研究所は、長石門下の寺松孝先生（旧結核胸部疾患研究所）と櫻田門下の岡村誠三、中島章夫両先生（旧工学部繊維化学科）の尽力によって創設された医用高分子研究センター（後ほど生体医療工学研究センターに改組）を一つの核として生まれた。

（いかに よしと 元再生医科学研究所教授，平成11年退官，専門は再生医療）

## 洛書

## マンガ考

高月 紘

由緒ある京大広報に自作のマンガを掲載することにいささか躊躇するが、洛書は落書に通ずと勝手に解釈し、マンガの話をしてみよう。

ご存知のように、現在の日本においては、マンガは良きにつけ悪しきにつけ日常生活に深く入り込んだ大きなメディアになっている。たとえばマンガ関連の出版部数を見ると、週刊コミック誌を含めると年間実に18億冊に及び、これは全出版物の3分の1にあたるという。また、日本のアニメーションは、世界中のテレビマンガに登場し、中には国際映画祭などでグランプリを受賞する作品まで現れている。今やマンガは世界に誇る新しい日本文化の一つになりつつあるといえよう。

とはいえ、マンガに対する教育界の視線は未だ非常に冷たく、ほとんど評価されることのない存在である。この背景には、1つには大衆向けマンガが娯楽のみを目的として、「暴力」や「セックス」を刺激的に扱っているものが多く、俗悪なものとのイメージがつきまとうことと、もう1つには、マンガは文章を読む能力に対し阻害要因になるという考え方があるようである。

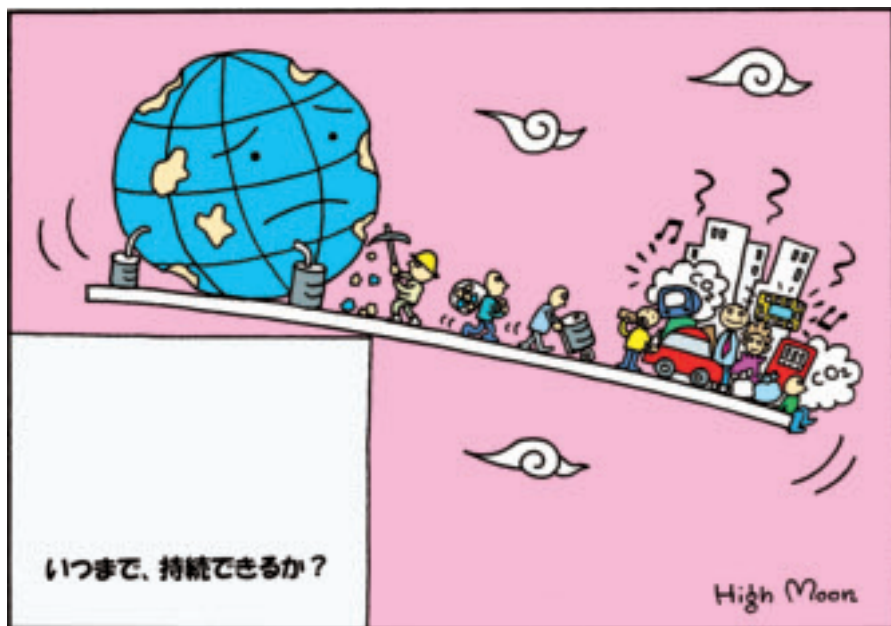
前者の批判に対して、マンガのもつ娯楽性にも多様性があり、漫画界としても本来のユーモアや風刺的価値を評価してもらう努力が必要であろう。後者の批判に対しては、教育人としては考えねばならぬ課題である。確かにマンガは小説のように文章を読み、そこから想像力を働かせて思考能力を高め、情緒をはぐくむというプロセスを省略し、いきなり読者へイメージを固定化させる作用をもっている。恐らく、人間がマンガを

読む場合、脳の働きとしてはパターン認識の部分が多く、文章を読む脳細胞とは異なった部分が関与していると思われる。したがって、望むらくは本を読む能力もマンガを読む能力もどちらも向上することが、教育上は好ましいのであろう。

マンガやイラストは映像に近いメディアであり、文章で表現できない情報を、一度に多量にかつわかりやすく伝達する機能を持っている。これから情報量がますます増加する時代を迎え、それらをうまくコントロールしていくにはマンガやイラストは不可欠になりつつある。恐らく最近の研究者も、学会発表等で研究のコンセプトを伝えるのに何らかのイラストを用いられる機会も多いと思われる。

著者の場合も国際学会等で下手な英語で説明するより、自作のマンガを用いて発表すると大変好評を博することがある。その意味でマンガはまさに国際共通語である。さらに、最近はマンガを用いて講義や講演まで行っている。これはいくら文章で環境問題や廃棄物問題の重要性を訴えても、学生たちや一般市民はなかなか読んでくれないし、まずは「きっかけ」作りにとマンガを活用するとそれなりに興味を示してくれるからである。そんな訳で近頃は教材作りと称して堂々と研究室にて環境マンガを描いているのである。

(たかつき ひろし(ペンネーム High Moon) 環境保全センター教授、専門：廃棄物処理)





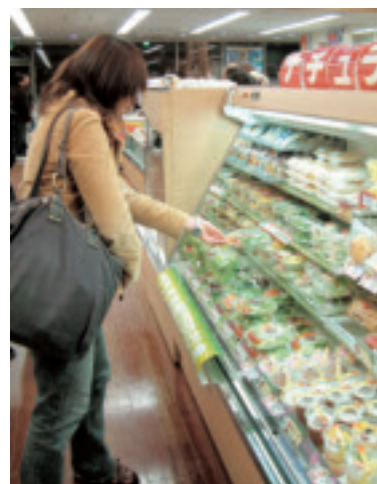
## 話題

## 吉田南構内にコンビニエンスストアがオープン

本学では、平成16年12月6日（月）午前7時、吉田南総合館北棟地階にナチュラル・ローソンセレクトジョン京都大学店がオープンした。国立大学へのコンビニエンスストア導入は全国初で、同店は、学生・教職員から要望が多かった長時間営業、土日祝祭日の営業、また、公共料金の代行収納、郵便局機能、ATM及びマルチメディア端末の設置などのサービスを提供する。



当日、同店のオープンを記念してオープニングセレモニーが開催され、教職員、学生、ローソン関係者など約100名が見守る中、尾池和夫総長及び篠崎良夫(株)ローソン近畿支社長の挨拶の後、尾池総長、本間政雄副学長、丸山正樹副学長、富田博之人間・環境学研究科長、学生代表、篠崎支社長等によるテープカットが行われた。その後実施された店舗見学では、総長をはじめとするセレモニー出席者、報道関係者等多数に参加し、ローソン関係者の説明に熱心に聞き入っていた。



サラダやおにぎりも充実

## 京都大学未来フォーラム（第7回）を開催

京都大学では、様々な分野で活躍する本学卒業生「OB・OG」を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第7回目を、時計台記念館・百周年記念ホールにおいて平成16年11月16日（火）夕刻に開催した。

第7回目の今回は、理学部を卒業され、現在は兵庫県立人と自然の博物館名誉館長、兵庫県立丹波の森公苑長として活躍されている河合雅雄京都大学名誉教授を講師に招き、大野照文総合博物館教授の司会で、「霊長類学事始め」と題して講演が行われた。

講演では、戦後欧米にかわって、日本で霊長類の社会を対象に全く新しい装いで登場した霊長類学の学問分野を樹立した経験談として、故今西錦司先生によって提唱された生物社会学に魅せられた学生・院生によるニホンザルの生態と社会の研究が契機となり、霊長類研究グループの結成とともに本格的な

霊長類の研究が京都大学で始まったことが述べられた。

自然科学の立場から人間とは何かということを進化というレールにのって考えることについては、サルを研究



するということは一つの必然であったこと。霊長類学の基本はフィールドワークにおける固体識別、長期観察であり、それらの総合認識が重要であること。個体識別と長期観察によってニホンザルの社会に文化的行動があることや、世代を越えて社会的遺伝がどのように伝播していったかを発見し、文化というものは人間世界だけのものではないという考え方に對し大きな貢献をしたことが強調された。

最後にはエチオピアにおけるゲラダヒヒを観察するフィールドワークとして、スライドを使った説明があり、長期観察、長期研究がいかに大事であるかということを強調しつつ、サル達と仲良くなり、サルの群の中に入れてもらい、サルと一緒に生活しながら長期観察する苦労話、生活の様子や群れの行動をユーモアもまじえて語られた。

聴講した学生、教職員、一般市民の方々155名はメモを取りながら真剣に聞き入り、また、学生等から仲間として受け入れてもらう方法などフィールドワークの研究手法について質問があり、有意義なフォーラムとなった。



## 能楽鑑賞会を開催

平成16年12月8日（水）に京都観世会館で第48回目となる能楽鑑賞会が開催された。

古来狂言と能は、セットで演じられてきた歴史があり、本学の能楽鑑賞会も狂言と能の2部構成で、狂言の笑いの世界と能の幽玄の世界を鑑賞してもらった。

狂言も能も共に約600年の歴史があり、本学の能楽鑑賞会開催に長年にわたり御協力をいただいている能の片山家は観世流であり、狂言の茂山家は大蔵流である。

狂言の演目は、「寝音曲」であり、演じてくださった13世茂山千五郎先生と2世茂山七五三先生は、共に重要無形文化財総合指定保持者。そして能の「景清」でシテ（主役）を演じてくださった9世片山九郎右衛門先生は、重要無形文化財各個指定（人間国

宝）の認定を受けておられる。

太郎冠者に謡を謡わせようとする主人と、酒を飲まないと言えないなどともったいをつける太郎冠者とのユーモラスなやり取りを演じる「寝音曲」には、会場のあちこちからゆったりとした笑い声が洩れていた。

一方、かつては勇将の武士であったが今は盲目の乞食となっている父とその娘とのやり取りを通じ親子の情愛や勇士の悲惨な末路を描く「景清」では、ぎりぎりまで凝縮された一挙手一投足を食い入るように見る会場は静謐な空間となった。

今回の能楽鑑賞会の参加人数は、約460名、6時30分の開演にもかかわらず4時40分頃には最初の学生が入場口に並びはじめ、開演時に会場は参加者で一杯になった。また、多くの留学生が鑑賞会に参加することからも、日本の伝統芸能への関心の高さもうかがわれた。

今後も学生部としては、課外教養の一環として能楽鑑賞会を続けたいと考えていますので、まだ能や狂言をご覧になっておられない方も、是非一度は能楽鑑賞会に参加していただき、日本人が作り出した世界最古の舞台芸術に接してみてください。

（学生部）



## お知らせ

# 京都大学21世紀C O E「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」 公開講演会『相転移とはなんだろう？—宇宙・物質のなりたち—』

1. 日 時：2月15日（火）13：30～
2. 場 所：時計台記念館 百周年記念ホール
3. 演題及び講師：「20世紀の物理から21世紀の物理へ」 シカゴ大学教授 南部陽一郎  
科学ライブショー “ユニバース” 理化学研究所 戎崎 俊一
4. 対 象：高校生以上一般，多数お集まりください。
5. 定 員：先着500名（申込不要）
6. 受 講 料：無料
7. 問い合わせ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学 理学研究科 物理学教室内21C O E 公開講演会実行委員会  
TEL：753-3842 FAX：753-3887  
E-mail：coe21symp@nh.scphys.kyoto-u.ac.jp
8. そ の 他：協賛 財団法人日本科学技術振興財団 科学技術館  
詳細はホームページをご覧ください。  
<http://www-nh.scphys.kyoto-u.ac.jp/coe21symp/>

## 日誌 2004.11.1 ～ 11.30

- |  |                     |
|--|---------------------|
| 11月1日 役員会  | 16日 教育研究評議会         |
| 2日 部局長会議   | 〃 大学評価委員会           |
| 5日 企画委員会   | 〃 企画委員会             |
| 8日 役員会   | 17日 国際交流委員会         |
| 〃 学生部委員会   | 19日 大学入試センター試験実施委員会 |
| 10日 メキシコ, Miguel Ruiz-Cabanas Izquierdo<br>駐日メキシコ大使 他1名，総長他と懇談   | 20日 11月祭（23日まで）     |
| 15日 役員会  | 22日 役員会             |
| 〃 英国, Ekhard Salje ケンブリッジ大学ク<br>レア・ホール学寮長，総長他と懇談                 | 24日 入学者選抜方法研究委員会    |
| フランス, François d'Aubert 国民教育・<br>高等教育・研究大臣付研究担当大臣 他<br>6名，総長他と懇談 | 〃 企画委員会             |
|  | 25日 京都大学地域講演会（岐阜）   |
|  | 〃 全学共通教育システム委員会     |
|  | 28日 名誉教授懇談会         |
|  | 29日 企画委員会           |
|  | 〃 役員会               |
|  | 〃 施設整備委員会           |

## 編集後記

京大広報は号外を除き月一回定期の発行なので，編集委員会は月に一度は開かれる。年度末の時期，他の委員会も頻繁に行われ諸事雑用に忙殺されて出席がおぼつかなくなるときがある。それでも，編集委員会に何とか出席できると不思議に気が落ち着く。何故だろうと考えてみてその理由が分かった。大学の行事や部局の動きの記事の読み合わせを通して，京都大学の活動状況に関する情報を，まとめて，いち早く得ることができる。怪しげな文が現れたときには，字句の使い方が正しいかどうかその場で検討が始まる。それが楽しいし，私には改めて日本語の勉強になる。また，寸言，随想，洛書の精読を任されたときは，執筆された多くの先生方を知っているため，別の一面をみてほくそえむこともある。名文に出会って感激することがある。これは役得だと思う。編集委員を担当して2年になろうとしている。間もなくお役目御免になるとのことであるが，私にとってはよい経験をさせて頂いた。（五十棲記）